『ファム・ファタールの娘』※本文一部抜粋

「へぇ……じゃあ、オレもこういう言葉を使えば、ボスに振り向いてもらえんのかな」
　手紙を放り捨て、キールがベルの耳元へと顔を近づける。
「えぇ……嫌よ」
「なんでだよ」
「貴方にああいう口調は似合わないわ。それに――」
　ベルはキールの胸倉を掴んで引き寄せると、唇が触れてしまいそうな距離で甘く囁く。
「そんなことしなくても、今まで何度も愛してあげたじゃない」
　見開かれたキールの目が、魅了の魔法をかけられたかのようにトロリと溶ける。
　その目を見たベルは、満足そうに目を細めて笑うと、チェアをクルリと回して座ったまま彼と向き合った。
　キールは当たり前のようにベルへ跪くと、右手を掬い取ってキスを落とす。そのまま腕を引き、ベルをチェアから立ち上がらせると、彼女の細い腰に腕を回してデスクの上へと座らせた。
　ベルの腰に腕を回したまま、キールは彼女の脚の間に体を滑り込ませ距離を埋めると、体の隙間が無くなった２人の唇が自然と重なる。
「ふっ、アンタはオレをその気にさせる天才だな」
「貴方が勝手にその気になってるだけよ」
「はっ……そうだな。オレが勝手に欲情しただけだ」
　唇へキスを落としながら、ひと回り大きなキールの手がベルの手を包むと、滑るように彼女の手に嵌められた革手袋の中へと潜り込んだ。
　ベルが入ってきた手を特に拒むことはせずされるがままにしていれば、その手は奥へ奥へと進み続け、革手袋がジワジワと脱がされていく。
　手をなぞるキールの指先の動き１つ１つが、無駄にベルの意識を引っ張った。
「……これ、もう外していいんじゃねぇか？」
「……外したいの？」
「もうしてる必要ないだろ」
「……そうね」
　彼女の肯定の言葉が先か、手袋がスルリと手から脱がされたのが先か、はたまた同時だったか。外された手袋が適当に放り投げられ、パサリと落ちた音がベルの耳に届く。
　『触れたくないもの』から守る為の手袋がなくなったベルの手とキールの手が重なり、指が絡めとられる。
　キールはベルの首元に顔を埋めると、スンと香りを吸い込んだ。自身を魅了して、誘惑されているのかと思わせる彼女の香りは、どんな香水よりも、どんな媚薬よりも彼を惹き寄せる。
　甘えるように、縋るように、強請るように擦り寄り、キールはその首元にキスを落とす。短く何度も、慈しむようなリップ音が鳴る。
　首元に降る柔らかい唇から与えられる擽ったい心地良さともどかしさに、ベルは空いている左手でキールの顎を掬い、その唇に自身の唇を押し付けた。絡む舌の感覚と、漏れ聞こえる彼の悩ましげな吐息を感じながら、絡めとられた右手を抜き取り左手の手袋を投げるように脱ぐと、キールの首に両腕を回す。触れ合っているところから体が熱くなり、胸越しに感じるキールの心臓の音が大きくなっていくのを感じる。
　すると、まるでもっと欲しいと強請るかのように、キールがベルの体中に手を這わせ始める。
　絡み付く唇を１度離せば、名残惜しそうにこちらを見つめるキールの溶けそうな表情に、ベルの背筋が高揚感でゾクゾクと震えた。
「キール……これ、使ってみる……？」
　彼女が手に取ってキールにチラつかせたのは、先程薬瓶から取り出した漆黒のカプセル。
　たった１粒摂取するだけで、体に与えられる全てが快楽に変わるのと引き換えにこの世を離れることになるかもしれないというのに、キールは怯える様子も一切見せない。
「いちいち聞かなくたって……」
　キールは漆黒のカプセルを持って笑う悪魔かもしれない美しい女に、まるで自身を差し出すかのように微笑み返した。

「アンタが望むなら、なんなりと……」
　女と男、2人の影が1つに重なった。

□ □ □

「――キール」
　落ち着きを払った心地良い声に名を呼ばれ、キールがそちらを振り返れば、彼が探していた女の姿が目に入る。
「起きたのね」
「……そこにいたのか」
「えぇ」
　カーテンが開かれた窓辺。バスローブ姿のベルは、ソファで寛ぎながら、ワインが入ったグラスを片手で揺らしている。
　シャワーを浴びてからそんなに時間が経っていないのだろう。ベルの髪はまだ少し湿っているようで、部屋の淡いライトに照らされたその姿は、瑞々しい艶やかな色気を纏っていた。
「黙っていなくならないでくれよ。寂しいだろ？」
「シャワーを浴びたかったのよ。汗をかいたから」
　足を組みながら、ベルはワインをひと口含むと、舌で味わうようにゆっくりと飲み下した。
　キールが両足をベッドから床へ降ろすと、視界の端に漆黒のカプセルが映る。
　カーペットに落ちていたそのカプセルを摘まみ上げ、キールはそれを指先で軽く転がした。
「これ、結局使わなかったな」
　キールの言葉に、ベルがチラリと視線を向ける。が、彼女の視線はカプセルを捉えるとすぐに手元へと戻り、グラスを振って中のワインを回す。
　使ってみるかとチラつかせたものの、結局彼女は最後まであのカプセルをキールに使うことはしなかった。
「使わないわよ。そんな悪趣味な薬」
「残念。少し興味あったんだけどな」
「……それは、遠回しにまだ足りないって言ってるの？」
「もしそうだったら、またオレに触れてくれるのか？」
　細めた目から誘うように向けられたキールの視線と、横目で彼を捉えたベルの視線が絡む。
　彼女は手にしていたグラスを傍にあったテーブルへ置くと、キールが腰掛けているベッドへと近づいて行く。
　ベッドに乗り上げ、キールを思いっきり押し倒すと、ベルはその上に跨って彼の顔を覗き込んだ。
「私じゃ満足できないってことかしら？」
「まさか。アンタとシて、満足しなかった時なんてない」
　満足しないわけがない。おかげでまたすぐに求めてしまう。そしてどんどん貪欲になっていく。
　心底惚れている女に触れられ、愛され、快楽を与えられ、身体中が満たされたと思ったらまたすぐに欲しくなる。
　彼女に「愛されたい」という欲求は留まることを知らない。肌を重ねれば重ねる程、キールはこのループから抜け出せなくなっていく。
「じゃあどういうつもり？」
「この薬を使うことで、もっとアンタを感じられるなら……それも悪くないって思った」
　キールの腕がベルの頬に伸びる。その手が頬を滑り、彼女の未だ水分を含んだ艶やかな髪を、一束優しく掴みキスを落とした。
　その間もずっと、キールの視線はベルの目から一度たりとも外れることはない。
「なんて言ったら……怒るか？」
　ベルはキールを見下ろしたまま小さく微笑む。

「キールは、本当に私のことが好きね」
「あぁ、愛してるからな」
「そう……でもお断りよ」
　キールの両腕を掴み、ベルはその腕を彼の頭の上で交差させると、耳元に唇を寄せて囁いた。
「勝手に動かないでね」
　耳元で囁かれたベルの声に、キールの背筋がゾクゾクと震え吐息が漏れる。
　その吐息に気分を良くしたのか、ベルは小さく笑って上半身を起こすと、キールの下半身の方へと体を下げていく。
「あァッ……！」
　キールの口から色を含んだ声が漏れ、仰け反るように顎が上がった。
　ベルに触れられたモノから快感が込み上げて、治まっていた熱がそこにまた戻ってくる。
　拘束されているわけではないのに、「動くな」と言った彼女の言いつけを律儀に守り、キールは無意識に自身の手首を握り締めた。
　息を整える暇も与えられず、ただ押し寄せてくる快楽の波を一心に受け、抑えきることのできない声を口から漏らしながら、なんとか浅い息を繰り返す。
　肌の色が赤く変わるほど握られた手首。自身で自身を拘束するキールの腕は大きく震えている。
　快楽に耐えようとするキールの手の中にあった漆黒のカプセルが、音を立てずにカーペットへと落ちていく。けれど、それには最後まで誰も気づくことはなかった。